

木曽川導水路「撤退できる」

名古屋市水道局元職員の武藤さん解説

学習会 水余りや負担増指摘

名古屋市の水道と木曽三川の関係を解説する学習会が20日、同市港区野跡の環境省稲永ビジターセンターで開かれ、「よみがえれ長良川実行委員会」の武藤仁事

務局長(75)＝岐阜市＝が、徳山ダム(揖斐郡揖斐川町)の下流から木曽川に水を送る木曽川水系連絡導水路事業の問題点を指摘した。元名古屋市上下水道局職



「名古屋市の水道と木曽三川」をテーマに開かれた学習会
＝名古屋市港区野跡、稲永ビジターセンター

員の武藤さんは、同市の1日最大給水量が1975年の123万トをピークに80万ト程度まで減少して未利用水が生じているにもかかわらず、徳山ダムや長良川河口堰(三重県桑名市)などの新たな水源開発が続いてきた経緯を説明した。その上で、事業凍結を経て河村たかし前名古屋市長の方針転換で昨年動き出した木曽川導水路に言及。事業費が当初の2・5倍の2270億円に膨らんでおり、完成後50～55年にわた

って名古屋市の水道料金に反映が見込まれるとして「名古屋の水は揖斐川から引かなくても木曽川で十分。工事は1歩も進んでおらず、利水者がいらないうちで撤退できる」と訴えた。

学習会は岐阜・愛知県などの市民団体でつくり河口堰の開門調査を訴える実行委員会が、環境活動を学ぶ「なごや環境大学」の講座として藤前干潟前の施設で実施。約30人が聴き入った。(堀尚人)